



探偵隊

八幡八景 国分寺の梵鐘



お寺の境内に鐘撞堂かねつづらというのはごく当たり前の光景ですが、国分寺には昭和52年まで鐘撞堂がなかったそうです。それ以前には仁王門におうもん（当時鐘楼門）に梵鐘が掛かっていました。

昭和30年、約1200年前の同寺創建当時から梵鐘が国の重要文化財に指定されました。

それに伴い昭和52年、破損を防ぎ、保存するために新しい鐘と掛け換えることになり、このとき一緒に現在の鐘撞堂ができました。

かつての梵鐘は、大変美しい音色で「国分寺の晩鐘」として、八幡八景の一つに数えられていたそうです。また、江戸時代初期の書簡によると、高知城の約り鐘が古くなったので、奉行所が一方的に国分寺に対し、お城へ梵鐘を召し上げるよう申し入れたというエピソードもあるくらい、その音色は珍重されていたそうです。

現在新しい梵鐘に掛け変わっており、龍頭の向きが違ったり、つき座の位置が下がっていたりと、以前のもものと少しばかり造形は異なっていますが、その鐘の音は今も変わらず、すがすがしい朝、また夕暮れのまほろばの地に響き渡っています。

いま部落は、そして...

部落の実態と今後の課題④

〔採用試験の現場では〕

（一九八八年九月三日付、

朝日新聞への発言より）

「次女の就職試験の話を知ると、親の学歴や職業、コネの有る無しなどを書く欄があり、親の仕事の内容などを詳しく聞かれたと言う。親は二人とも中学校卒、職業は、漁業とねん糸〔加工工場勤め〕、

（中略）

私の父は、シベリア抑留で病気がちであった。家は【昭和】二十八年の水害で流され、【私は】中学校卒業と同時に一家の柱として、十五歳から海に出なければならなかった。高校進学など夢にもかなえられぬと知ってはいたが、進学を断念する目的の絶望と悲しみの日々を今も忘れない。

戦争をのろい、人生をのろっても、私の学歴を変えることは出来ない。学歴を変えるだけの生活のゆとりはなかった。今も弱い体にむち打ち、自分に合わない肉体労働であ

る漁に出ている。

自分の味わった絶望と悲しみを、再び二人に味わってもらいたくないと、長女は大学を出て高校の教員をしている。親の無念さや必死に働く姿を見て、どれにも負けぬ根性と努力で、親の希望と夢をかなえてくれたのだと思う。

親の学歴や職業などを就職試験に、なぜ聞かなければならないのだろうか。もし、親のために不採用になったのなら、私は何と言つて娘に謝ればよいのだろうか。」

同和教育シリーズ

（文中の）

（一）は注釈

この投書の全体を通して読むと、本人の能力や適性に関係のないことをしつこく聞く企業への怒りが読み取れると思います。親の職業や学歴が、仕事をするうえでどんな関係があるのでしょうか。

企業の差別体質は、何も部落にだけ向けられるのではなく、現在の日本社会でハンデ

イを背おわされて生きていく人々へも向けられるのです。

次の例を見てください。

「父と母の仕事は何か。父親がいけないのはどうしてか。家は持ち家か。平屋か二階か。妹はどんな子か。」

（広島県丁社の身元調査より）

「本籍、現在の家庭の生活状況、家族状況（続柄、年齢、職業又は勤務先）、読書新聞、尊敬する人」

（東京都N社の社用紙より）
「誠に残念ではあります。片親の美容師見習は、我社では半年も続くことが無く、美容室内でのコミュニケーションがとれたためしが有りません。」

（九州B美容室の不採用理由）

これらの事例は氷山の一角です。

